

令和5年度 府中市立本宿小学校学校経営報告

令和6年3月31日

校長 藤咲 孝臣

(教育目標)

心身ともに健康で、知性と感性にとみ、自ら学ぶ実践力をもつ人間性豊かな児童「輝きのある子」の育成を目指す。

- 自分の考えをもち、やりぬく子供 → あきらめない心、折れない心を育む（粘り強さ）
自ら主体的に考え、課題意識をもち、問題を粘り強く解決していく能力や態度を育成する。
- 豊かな心をもち、仲良く助け合う子供 → 自他の理解と尊重する心を育む（他者意識）
人権を尊重し、公共の精神を尊び、お互いを認め励まし合う温かな心や他人を思いやる心を育成する。
- 健康安全に気を付け、体をきたえる子供 → 丈夫な体から丈夫な心を育む（健康な心身）
自他の生命を尊重し、自ら健康を保ち、体力づくりに取り組む態度と実践力を育成する。

1 目指す学校像

創立54年を迎える本校の歴史と伝統を受け継ぎながら、ふるさと府中に誇りをもち、世界に活躍する府中っ子を育てる。保護者、地域の信頼に応え、教育目標である「輝きのある子」の育成を目指す。

(目指す学校)

◎子供たち一人一人に勇気や希望を与え、よさや可能性を引き出す学校

(1) 子供が第一の学校づくり … 明日も来たくなる学校

- ① 安心、安全な学校。 → 良好な環境・良好な集団・良好な人間関係づくり
- ② 心の温かい学校。 → 挨拶の定着の徹底
- ③ 一人一人のよさや可能性を引き出す学校。 → グローバルに活躍できる子供の育成
- ④ たくましく自立を目指す学校。 → 心身を鍛える 体力の向上

(2) 教職員が、学び合い磨き合う学校づくり … 「チーム本宿」として教職員も輝く学校

- ① 教職員一人一人が自覚をもつ（社会人、教育公務員として） → 服務事故ゼロ
- ② 教職員が互いに協働する。（組織として 意図的計画的に） → 授業交換合同授業
- ③ 教職員が互いに磨き合う。（自己研鑽 研究と修養に努める） → 研修と研究

(3) 保護者・地域と協力・連携する学校づくり … 責任と信頼を基に、学校・保護者・地域が連携して、共に子供を育てる「共育」の推進

- ① 保護者・地域に広がる。 → 開かれた学校づくり
- ② 保護者・地域から学ぶ。 → 地域環境、地域人材の活用
- ③ 保護者・地域と繋がる。 → 地域行事、学校行事への参加

2 今年度の取り組みと自己評価

(1) 教育活動の目標と自己評価

① 児童の学力の定着、向上を図る。

- ・授業のねらいを明確にした指導計画を実践するとともに、実施時期や指導内容、指導形態を工夫し、授業の充実を図った。
- ・毎時間のねらいを明確にし、児童が達成感を味わえる「分かる授業・楽しい授業」を行った。特に、「本宿スタイル」として各教科で問題解決学習を推進し、主体的・対話的に学ぶ意欲や達成感を高めるために、授業観察での指導や校内研究・研修を通して教員の授業力向上に努めた。
- ・タブレット端末や大型 TV など ICT 機器を効果的に活用し、教科の特性や授業のねらいに沿った活用を行った。意見交流や意見集約、資料収集、作品制作、プレゼンテーションなど、個人で、また児童同士がかかわり場面で効果的に活用させ、個別最適化の学びにつなげた。
- ・学習規律（授業規律、持ち物、ノート指導等）を指導した。また、話し方や聞き方の指導とともに、手を挙げて指名されたら「はい」と返事をし、立って答え、「です。」で終わる、「はい」「立つ」「です」の徹底の指導を全校で取り組んだ。
- ・外国語専科教員とALTや担任教師との連携を強化し、「外国語」「外国語活動」の授業を充実させるとともに、「世界とつながる英語 Enjoy Week」の取組として英語を母国語とする外国人と関わる機会をつくり、休み時間や給食、清掃時間など学習や生活の中で英語を活用した交流場面を設定した。児童は積極的に英語による表現にチャレンジし、慣れ親しもうと意欲的に取り組んだ。
- ・低中学年では、授業交換（定期的・単発）や学年内交流授業を実施し、担任以外から学ぶ機会を日常的に設定した。学年内で児童と教員の関係が密になった。しかし、時間割の制約があり、高学年での実施は難しかった。
- ・学習において異学年が交流する機会を学期に一回以上設定した。調べ学習の成果を発信したり、交流会などで一緒に活動したりすることを通して、学び合い高め合う学習を実現するとともに異学年での良好な人間関係をつくることのできた。

② 教師の資質能力の向上を図る。

- ・校内研究で「思いや考えを主体的に言葉にできる児童の育成 ～書く活動を通して～」というテーマで授業研究に取り組み、授業力の向上を目指した。国語教育の専門の大学教員を複数回講師に招き、指導を受けた。国語科についての指導法改善につなげることができた。次年度は読む力を育成させるための指導法の向上をテーマに研究を実施する予定であり、同講師を招聘する予定である。
- ・情報担当教員やICT支援員が講師となり希望者参加型のミニ研修を複数回実施し、教員個々の困り感やニーズに沿った学びの場を設け、タブレット端末活用のスキルアップにつなげた。
- ・農業ボランティアの方を、年間を通してゲストティーチャーとして招聘し、栽培活動における児童の指導とともに交流を通して教員の地域連携についての意識向上を図った。

- ・ヤギの飼育について、東京農工大学や近隣企業、近隣小学校と連携を密にしてノウハウを学び、サポート体制の充実を図った。
- ・自己申告を活用し、教員一人一人の今年度の目標を明確にもたせるとともに、研修の計画を考えさせ、進捗状況を確認するなど継続的な取り組みを実施した。
- ・経験の浅い教員を中心に、校長が日常的に短時間の授業観察を実施し、喫緊の課題解決につながるような指導助言を行い、授業改善につなげた。
- ・学年内で交換授業や学級を解体した授業を実施して学年会で振り返りを行うことで、学年全体での児童理解を深めるとともに指導法の見直しを図り、指導力の向上につなげた。
- ・全教員が週の指導計画作成及び提出をおこない、教育課程の自己管理を実践するとともに、管理職が教育課程の適正な進行を定期的に確認することができた。
- ・体罰防止、個人情報管理、都が示す重点項目について教員の意識向上を図るため、3回のサービス事故防止研修に加え、毎週の打ち合わせや月一回の職員会議を活用したサービス事故防止研修や情報提供を行った。教員の意識向上を図り、サービス事故ゼロを実現している。

④ いじめの未然防止と安全安心に関わる指導の推進を図る。

- ・府中市いじめ防止対策推進条例及びいじめ防止対策基本方針に基づき、本宿小学校いじめ防止対策委員会を設置して組織的計画的に児童の課題を共有し、いじめにつながる可能性のある課題の早期発見や未然防止など、全教職員で協力した指導や対応を実施できた。また、教育委員会との連携も密に行った。
- ・年間3回の「いじめアンケート」や毎学期複数回「いじめ防止授業」を実施し、児童の実態把握に努め、未然防止、早期解決を図った。その他、日常的な児童観察、児童理解に努め、情報交換を密に行った。
- ・毎月一回の避難訓練を通して、火災や地震発生時の避難行動を繰り返し指導し、児童は自助・共助の意識をもち自覚して行動できるようになった。また、府中市の防災訓練の会場となり、府中市や地域と連携した訓練を実施することができた。
- ・アレルギー対応シミュレーションを毎学期初めに実施し、教員間での対応手順の確認の徹底を行った。また、児童のアレルギー反応についての確実な情報提供を保護者とを行い、食物アレルギー対応を確実に行った。

④ 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童の再登校を図る。

- ・不登校児童の保護者との面接、連絡を定期的実施し、共通の目標のもと、協力して対応した。不登校児童の登校回数の増加や不登校の解消につなげた。また、スクールカウンセラーやけやき教室などとの連携を図り、登校意欲の向上につなげた。
- ・保健室、サポートルーム、教育相談室やSCルームなど不登校児童の居場所をつくり、対象児童一人一人に応じた居場所をつくることで登校を促した。また、タブレット端末を活用し、学級担任やスクールカウンセラーと不登校児童がかかわり合う場や機会をつくった。
- ・ICTを活用して、不登校児童や保護者との情報交換や学習支援を行うことで学習を保障した。不登校傾向児童の複数名が少しずつ登校できるようになった。

- ・サポートルームを整備し、支援員の配置や備品の整備などを行った。不登校傾向や教室に入れない児童の居場所として活用し、児童一人一人の課題に沿った対応を充実させ、改善を図ることができた。

⑤ 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。

- ・保護者の合意の基「学校生活支援シート」を1学期中に作成し、保護者と連携した計画的な指導を実施した。
- ・個別に配慮が必要な児童へは、学校支援員の個別指導、巡回指導、スクールカウンセラー、特別支援教室等の階層的な支援を実施した。
- ・保護者や関係機関（巡回相談チーム、民生児童委員、府中市子育て世代包括支援センターみらい、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、家庭の課題への対応や児童虐待の予防に努めた。

⑥ 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。

- ・本校の合言葉である3つの「あ」（あいさつ、あんぜん、あとしまつ）を指導し、規範意識の向上と自他を尊重する心を育成した。
- ・学期に1回、生活月目標にあいさつを掲げ、重点的にあいさつ指導を行った。また、運営代表委員会が中心となってあいさつ運動を定期的実施し、全校への働きかけを行い、あいさつを通して豊かな人間関係づくりを行った。
- ・副籍交流活動として学期に1回、特別支援学校児童を迎え、該当学年や学級の中で行事や学習で交流を行った。また、運動会や展覧会など学校行事での交流を行い、展覧会では作品の交流も行った。
- ・定期的なたてわり班活動、たてわり班による展覧会合同作品作り、たてわりオリエンテーリングやたてわりお別れ弁当給食など、たてわり活動による異学年交流を推進した。児童間の年齢を超えた豊かな関わりの中で思いやりの心を育むとともに自他を尊重する心や自己有用感を高めることができた。
- ・農園活動やスポーツ体験、福祉体験、消防団やお囃子などの見学や体験活動を全学年で実施した。それらの活動を通して、社会性を身に付けるとともに、地域への愛着や自然への感謝や畏怖の心、働くことの意味や社会貢献の大切さを育んだ。

⑦ 体力の向上を図る。

- ・体育向上委員会のメンバーが中心となり、年間を通して運動週間を設定し、児童の体力向上を目指した。短なわ週間やロープチャレンジにつなげる長なわ週間、持久走週間を実施し、朝や休み時間、体育の学習の中で児童の体力向上に努めた。
- ・6年生は府中市連合陸上記録会に参加した。その準備として、有志参加の朝練習や放課後練習を行い、体力向上委員会の教員が指導を担当した。また、連携中学校の陸上部の生徒も練習の手伝いに参加し、交流を図った。

⑧ 未来へつなぐ府中2020レガシー教育の取り組みを充実させる。

- ・グローバルに活躍できる子供を育てるために、1学期に「世界とつながる英語 Enjoy Week」、2学期に「国際交流・国際理解 Week」、3学期に「日本語・日本文化 Week」を設定し、学校や学年で共通の取組をしたり、ゲストティーチャーを招いて学ぶ機会をつくったりした。交流する・調べる・体験する活動に意欲的に取り組み、日本や外国のよさを学ぶことができた。

- ・ウィーン市ヘルナルス区の訪問団の一行を全校で温かく迎えることができ、児童の外国への興味や関心を高めることができた。歓迎の準備や歓迎集会を全校で実施することにより、児童の活躍の場を設けることができた。また、児童のコミュニケーションの力を高める場にもなった。
- ・パラスポーツの競技者を講師として招き、パラスポーツ選手からの講話やパラスポーツ体験により、オリパラの精神と障がい者理解につなげた。

⑧ コミュニティスクールの推進

- ・地域と連携した体験学習である「ふるさと学習」を、1学年1取組で実践した。お囃子、お祭り、農業体験など「ふるさと学習」の取り組みにより、地域について児童が深く学び、地域の一員としての自覚、地域を愛する心情を育てた。また、地域連携コーディネーターが中心となり、本宿小サポーターズクラブや JA 関係者、地域協力者等の協力を得て、水田・農園活動を推進した。
- ・日々の学習の成果、児童の様子、教育活動の紹介などを学校便りやホームページ、校内写真掲示等で日常的に保護者や地域に発信した。
- ・図書やヤギボランティアの方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かした。また、ヤギ飼育について、近隣企業や市内小学校と協力体制をつくり始めた。
- ・府中市主催の防災訓練の会場校となり、市の防災担当課と連携して地域防災の意識を高めることができた。有志の児童や保護者を含む地域住民が多数防災訓練に参加した。

⑨ 小中連携の推進

- ・連携校三校がそれぞれの学校を訪問して授業参観と情報交換などを実施した。小中連携コーディネーターが計画的に準備を進め、分科会単位で3校が話し合いを活発に進め、各校の実践について協議を行い、交流を深めることができた。
- ・中学校の音楽担当教員が6年生に合唱の出張授業を行い、専門性の高い指導を受けることができた。また、中学校進学に向けて、小中学校の教員が交流し情報交換を実施した。
- ・中学校の陸上部生徒が顧問教員とともに来校し、連合陸上記録会に向けての放課後練習に手伝いとして参加し、指導のサポートを行った。児童生徒交流が実現した。

(2) 重点目標への取り組みと自己評価

① 学校が楽しいといえる児童が90%以上

児童のアンケートでは、91%（前年比3%↓）で、数値目標は辛うじて達成した。数値が3ポイント減少したことについては重く受け止める必要がある。児童が「学校が楽しい」といえるためには、安心して学べる環境が必要である。仲の良い友達がいる信頼できる教師がいること、分かる授業や楽しい授業が行われていることなどがあげられる。また、学習や行事に前向きに取り組むことができるような働きかけも必要である。良好な人間関係や集団作りとともに意欲をもって学べる環境や働きかけを行っていきたいと考える。「分かる授業。楽しい授業」を目指し、魅力のある授業づくりをすすめる。また、不登校傾向の児童の登校意欲が少しでももてるよう児童の安全安心な居場所としてサポートルームのさらなる充実を図り、児童一人一人の居場所づくりをすすめる。

② 漢字・計算の定着率90%以上

2学期末の学習状況調査では、漢字の定着率が1・2・3年平均で88%（前年比6%↓）、4・5・6年平均で87%（前年同数値）であった。計算の定着率が、1・2・3年平均で91%（前年比3%↓）、4・5・6年で82%（前年比4%↑）であった。平均値では、1・2・3年の計算以外は目標を達成することができなかった。しかし、学年や学級別で見ると、9割を大きく超えている学年や学級もある。二極化の傾向も見られる。

授業はもちろん朝学習や家庭学習などでも反復学習に力を入れ、繰り返し取り組む中で習熟を図り、基礎基本の定着の徹底を図っていく。また、ICTを効果的に活用したり、指導形態を工夫して個の課題に応じた指導を実施したり、個別最適化の学習を実現し、学力の定着を図っていく。更には、家庭と連携して児童の課題に沿った支援を保護者に伝え、家庭学習を充実させることにより学力の定着を図る。

③ 家庭で学習する習慣（学年×10分）が身に付いている児童80%以上

保護者アンケートでは75%（前年比4%↑）であり数値が増加したが、児童アンケートでは66%（昨年度比6%↓）で、前年度を下回るとともに目標も達成できていない。各学年や学級で年間を通して家庭学習の大切さについて児童や家庭に伝えてきたところであり、家庭への周知や理解もそれなりになされているようである。しかし、児童と保護者の理解に差があるようであり、児童への働きかけの必要性を痛感している。来年度は、今年度同様に年度当初の保護者会で学校長より「学習スタンダード」及び家庭学習について保護者に周知するとともに、各学期初めに各学年に学年集会をもたせ、家庭学習の意義や意味、必要性などを学年に応じた形で周知し、児童の意識を向上させていきたいと考える。さらには、講話朝会でも定期的に児童に家庭学習の意義を話し、家庭学習に主体的に取り組むようにする。

④ 友達に優しくしようと心がけている児童90%以上

児童アンケートでは96%（昨年度比1%↓）で、目標を達成できた。今年度も教育目標「豊かな心を持ち仲良く助け合う子ども」を受け、学級で、学年で、異学年交流の場で、学び合う場面をたくさん作り、自他の尊重につながられるよう指導を続けた。特に異学年交流の場や機会は有効であり、優しい言動や思いやりのある言動がたくさん見られ、褒める機会につながった。

次年度も引き続き「あいさつ」「ありがとう」「ごめんね」の言葉を大切にしていって温かい人間関係づくりに取り組んでいきたいと考える。

⑤ すすんであいさつする児童90%

保護者アンケートでは90%（2%↑）で、児童アンケートでは86%（昨年同数値）で目標を若干下回った。毎朝、校長が校門に立ち児童と挨拶を交わす中で、「自分から」挨拶する児童は目に見えて増えてきたと感じている。ただ、個人差も実感としてあり、皆が「いつでも・どこでも・誰とでも・自分からあいさつ」できるようになるための働きかけは今後も必要である。運営代表委員会が「あいさつ運動」は非常に効果的であり、今後も続けていきたいと考える。さらには、保護者や地域にも協力を依頼し、地域ぐるみであいさつ運動を展開し、あいさつの習慣化・日常化を徹底する。あいさつを通して地域の中の豊かな人間関係づくりや防犯にもつながりたい。

⑥ 外で元気に遊ぶ児童 90%

児童アンケートでは86%（前年比28%↑）で目標の達成はできなかったが、前年度から大きく数値が伸びた。短なわ、長なわ、持久走の各週間をもとに、体育向上委員会が中心となり年間を通して運動に親しむ機会をつくったことが功を奏したと考えられる。また、各学級担任も週一回のクラス遊びの実施を通して児童を連れ出すなど全校での運動の日常化への働きかけがなされ、その結果数値の大幅な伸びにつながった。ただ、課題として学年差や個人差が大きく、学級児童への効果的な働きかけは引き続き必要であると考ええる。

次年度も全教育活動の中で運動の日常化を目指し、体力向上につながる取組を計画的に実施していく。

⑦ 学校の決まりを守って生活する児童 90%

児童アンケートでは94%（前年比1%↓）で、昨年95%、一昨年94%と目標を継続して達成できている。児童が学校に決まりを守って生活しようとする意識が定着している。来年度も児童の規範意識を育み、決まりを主体的に守る児童の育成に努めたい。しかし、今年度、時間を守ることについては、学年差や個人差が見られた。また、放課後の遊び方などの課題がしばしば見られた。家庭とも連携し、繰り返し指導していく。

⑧ 自分の安全を自分で守ろうと心がけている児童 90%

児童アンケートは94%（前年同数値）で、今年度も目標を達成できた。しかし、保護者アンケートでは87%（前年比4%↓）と前年を下回った。交通安全教室や、毎月の避難訓練、セーフティ教室などを確実に実施しているが、その内容を学校便りや学校ホームページで保護者や地域に発信する機会をつくり、学校の安全への取組の周知を図っていく。

児童の安全への意識は定着し、日常的に指導している「自分の身は自分で守る」という意識が浸透してきたように感じられる。児童に対しても保護者に対しても、毎年実施している自治会主催の地域の防災訓練などにも積極的に参加するよう呼びかけ、地域と連携して安全や防災への意識をさらに高めていく。

3 次年度以降の課題と対応策

(1) 児童の学力の向上を図る。

- ① 分かる授業楽しい授業の実現を目指し、ねらいを明確にした授業の徹底及び、友達との交流により児童同士が高め合う授業等、本校で実践してきた本宿スタイル「学び合いのある授業」の徹底を図り、全教員が全ての授業で実践していく。
- ② 問題解決学習の充実に向けて、各学年で各教科における教材研究や指導法の改善に努め、指導の充実を図る。また、学年内で交換授業を定期的実施することで、授業の質を上げ、児童の学力の向上につなげる。また、学習において、指導と評価の一体化を図るための、評価方法の改善も同時に行っていく。
- ③ デジタル教科書やICT機器を効果的に活用するとともに、講師や学習支援員との連携を深めるなど指導体制を工夫して個に応じた指導の充実を図り、個別最適化の学びにつなげる。

- ④ 学年で共通した家庭学習を実施するとともに、家庭と連携し児童の実態に応じた家庭学習の取り組みをさらに強化する。
- (2) 教師の資質向上を図る。
- ① 校内研究で「児童の読む力を高める指導」をテーマに全教員で取り組み、国語科の指導法を学ぶことで授業力の向上を目指す。全教員が授業を日常的に公開し合い、互いを高め合う。
 - ② 主任教諭を核とした組織的なOJTを計画的に実施し、若手教員の育成を行う。構造的な板書、個に応じた机間指導・支援、ノート指導などの指導技術を中心に、教師の指導力の向上を図る。主幹教諭とOJT担当の主任教諭に進捗状況の管理をさせる。
 - ④ 自己申告を活用し、各自の授業改善の目標、方法を指導する。また、ワークライフバランスの意識を高め、自己の働き方の管理を計画的に行えるようにする。
 - ⑤ 3回のサービス事故防止研修、職員会議や職員夕会を活用したミニ研修を行い、サービス事故防止への教員の意識を向上させる。次年度以降もサービス事故ゼロを目指す。
- (3) 人権感覚を高め、いじめの未然防止、早期解決を図る。
- ① 学年全体の担任であるという意識を全教員にもたせ、学年全体で児童の実態把握に努め、いじめ防止対策委員会などによる組織的な対応、スクールカウンセラーの活用、保護者との連携などにより、いじめの未然防止、早期解決に努める。
 - ② 人権尊重教育に計画的に取り組み、弁護士など専門家を講師に招聘して児童及び教員の人権意識や人権感覚を高める。また、専門家によるいじめ防止の授業を実施する。
- (4) 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童を再登校に導く。
- ① 学年チームによる日常的な児童観察を行い、スクールカウンセラーや保護者との連携を強化する中で児童の心情や取り巻く環境を理解するように努め、問題の未然防止と早期発見・解決に向けて取り組んでいく。
 - ② 校内委員会での情報共有を徹底するとともに、教育センター、けやき教室、みらい、スクールソーシャルワーカーとの連携を図り、組織的に改善を促す。
 - ③ サポートルームの支援員の配置や環境整備を行い、不登校や登校を渋る児童、教室に入られない児童の居場所の充実を図る。児童一人一人の課題に沿った居場所にし、児童の登校を改善できるようにする。
- (5) 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。
- ① 個別に配慮が必要な児童へは、学校支援員のサポート、巡回指導、スクールカウンセラー、特別支援教室等の階層的な支援を実施する。
 - ② 保護者や関係機関（教育センター、巡回相談チーム、民生児童委員、みらい、はばたき、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努めるとともに、保護者や家庭支援につなげる。
- (6) 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。
- ① 学期に1回、生活月目標にあいさつを掲げたり、挨拶指導重点週間を設けたり、あいさつ運動を実施したりして、重点的にあいさつ指導を行う。PTAや自治会など保護者や地域への働きかけを強化し、地域ぐるみであいさつの推進を図ることにより、児童の健全育成につなげる。

(7) コミュニティスクールの推進

- ① 地域と連携した体験学習である「未来につながる府中2020レガシー」の「ふるさと学習」の取り組みを充実させ、地域で活躍されている方や地域の施設や環境を広く知る機会をつくり、各学年で児童の意識をさらに高める。地域の一員としての自覚や地域を愛する心情をさらに深める。
- ② 地域行事への参加を積極的に児童に呼びかけ、地域とともに子供を育てる教育の推進を図る。

(8) 小中連携の推進

- ① 3校の教員が互いに学校訪問することにより小中の教員が交流して連携を図り、学び舎育ちの視点での教育課題に対応する。今後、地域の課題やニーズに合った分科会構成を再設定し、より有意義な連携にする。分科会ごとの課題研究、研究協議をの充実を図る。
- ② 中学校音楽科教員の小学校出前授業や連合陸上記録会の陸上部による練習手伝い教など、教員や生徒の直接交流が実現した。他教科の教員の出張授業や運動会の手伝いなどの児童生徒交流も実現していく。